The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人と物との血縁関係を表明するもの : メルロ＝ポンティにおける唯物論の可能性について
Author(s)	西村, 高宏
Citation	メタフュシカ. 2000, 31, p. 139-149
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66638
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

人と物との血縁関係を表明するもの

――メルロ＝ポンティにおける唯物論の可能性について――

西村高宏

序

メルロ＝ポンティにおいては、「歴史的な意味とは（まさに）人間相互間の出来事に内在」するものとされる。しかしながら、他方でそれは「下部構造の惰性とか経済的な諸条件、さらには自然的諸条件の抵抗」などを受けるものであるとも言われ、むしろメルロ＝ポンティにとって意味は「物を媒介として」現われてくると言える。またそれは、「歴史の横糸」とも呼ばれる「制度」という「物の秩序」のうちに現出するとも言われ、メルロ＝ポンティにおいて意味は、常に「マテリアルな存在契機のうちにこそ受肉する」ものと見なされるのである。事実そのような考えを裏付けるように、メルロ＝ポンティは「物質」や「物」という概念を幾度となく取り上げ直し、それに基づきながら自己の唯物論についての解釈を逞しくしていく。(1) それは、まさに「物のうちに具現された人と人との関係」を告げ知らせることを試みてきたマルクス本人の唯物論が、エンゲルスの『自然弁証法』に端を発し、レーニンによる『唯物論と経験批判論』などへと徐々に引き継がれていく流れのなかで、いわゆる「弁証法」を単に自然存在（物）のなかにのみ据え付けようと試みる、極めて自然主義的な唯物論へとふたたび堕してしまうことへの強い警戒心からとも言える。なぜなら、そこにおいては、マルクスにおいて全体的統一的に理解されていた人間と自然（物）との関係が、単に自然の物質性や必然性の問題へと移し替えられたままに議論され続けることになるからである。したがってメルロ＝ポンティは、一方でこのような自然主義的な傾向へと極度に偏った、いわゆる狭隘な「弁証法的唯物論」を問題の外へと追い遣りつつ、他方では、マルクスの「実践」概念に関する議論をもとにしながら、再度、何らかのかたちで「主体が介入」するような「全体的な弁証法」を模索し始めて

いくのである。そして、そこにおいてメルロ＝ポンティは、マルクスに倣いつつ「物質」という概念を「人間の共存の体系のうちに組み込まれたもの」として積極的に捉え返し、「物が人となり、人が物となるようなこの交換」（AD52）の関係を「復原（restitution）」することを、唯物論を考察する際の最も重要な課題として自らに要請するのである。つまりメルロ＝ポンティは、マルクスの唯物論に寄り添いながら、自身の唯物論の特質を「人間と外界、主体と客体とのあいだの血縁の関係（parenté）を表明する」ものとして性格づけようと試みるのである。しかしながら、マルクス本人の唯物論には、この人と物との「血縁関係」そのものを「表現する手段が欠けている」（AD97）、メルロ＝ポンティはそのような認識に強く突き動かされながら、最終的に、この「血縁の関係」を「表現」するための「手段」を提示することのうちに、自身の唯物論の独自性を見い出すに至るのである。

一　人と物との「血縁関係の表明」としての唯物論

後期エンゲルスにとっては、「物質」とは「運動する物質（Stoff）」（DN513）のことを意味する。エンゲルスにおいて、「物質」が「運動するもの」として制限されるのは、「物質」のもつ「さまざまな形態や種類それ自体が、再度、その物質の運動を通じてのみ認識され得る」という独自の「物質」観に裏付けられてのことである。エンゲルスにおいては、「諸物質（Körper）のもろもろの性質が姿をあらわし得るのも」、まさにこの「物質の運動」のうちにおいてとされる。したがって、後期のエンゲルスにおいては、「運動しない物質については何も言うことができない」。しかしながら、だからこそ逆に、この「運動の諸形態からのみ、運動する物質の性状（Beschaffenheit）が生じて」くると見なされるのである。とはいえ、この「物質の運動」は、その背後に何ら法則性を備えずに生じてくるようなものでは決してない。そうではなくて、むしろ「物質」は、その循環過程のなかで、ひとつの「自然の発展法則」に従ってのみ「運動する」ものとして理解されるのである。そして、さらにここで強調しておかなければならないのは、エンゲルスにおいては、この「法則」が「必然的にその循環の特定の段階のなかで、思考する精神をも生物（有機的存在）のなかから生み出さずにはおかない」（DM466）ものとして理解されているという点である。つまりエンゲルスは、同時にそこにおいて、精神と物質とが同一の必然的法則によって支配されているということ、すなわち、唯一「自然の発展法則」によってのみすべてが支配されているということを示そうとするのである。そしてエンゲルスは、この「自然全体を支配するもの」としての「自然の発展法則」を、「弁証法、いわゆる客観的な弁証法」の諸法則として

理解しようと試みる。その際、エンゲルスが想定する「弁証法」は、自然の発展過程と連関との説明方法を供給する思考形態のことを指し、またそれは、種々の認識領域をも体系づけ、繋ぎ合わせるところの理論としても捉えられているものなのである。そして、エンゲルスにおいて「自然全体を支配する」ものとされていた「客観的な弁証法」に対して、「いわゆる主観的な弁証法、弁証法的な思考は、自然のいたるところでその真価を現しているところの、もろもろの対立における（物質の）運動の反映（Reflex）にすぎない」（DM481）ものとされてしまうのである。つまりエンゲルスは、最終的に「弁証法を物質（自然）のうちにのみ据え付け」、それと同時に、「人間の存在様式をも自然のうちに移し入れてしまう」（AD97）のである。[2] そこでは、当然のことながら、「弁証法的に思考する者と対象とのあいだにある絡み合い（implication）の関係の発見」（AD95）など到底起こり得る筈もない。それどころか、むしろそこでは、弁証法が、単に「歴史や、さらには自然について、ここに『相互作用』とか『質的な飛躍』とか『矛盾』があるというだけの、ある種の記述的特性の単なる確認にすぎない」ものにまで成り下がってしまう。弁証法は、完全に「自然化」されたかたちで提示されてくることになるのである。

このように、「人間の存在様式」をも完全に「自然化」してしまうエンゲルスの「弁証法的な唯物論」に対峙するため、メルロ＝ポンティは、ふたたびマルクス本人の唯物論である「実践的な唯物論」にまで立ち返ることを自らに要請する。というのも、もともとマルクスにおける「物質」概念は、後期エンゲルスの言うような「運動する物質」といった観点からでのみ捉え切れるような性質のものでは決してあり得ないからである。またそれは、レーニンが『唯物論と経験批判論』のなかで規定した「物質」観、すなわち「物質の唯一の『性質』は、客観的実在であるという性質、すなわちわれわれの意識のそとに存在するという性質」[3] に他ならないとして、「物質」を「意識から独立した客観的な実在」存在という貧困な規定のもとへと押し込めてしまう「物質」観でも決してない。そうではなく、むしろマルクスにおける「物質」概念は、まさに「人間たちの物質的生活」の概念に他ならないものとして理解されなければならない、メルロ＝ポンティは、マルクスの「物質」概念を、それが「もう一方の『意識』と同様に、決してそれだけ切り離して考えられ得る」ようなものとしてでは決してなく、むしろ「社会関係の総体」として捉えられる「人間の共存の体系のうちに組み込まれた」（SNS229）ものとして積極的に解釈し直そうとするのである。つまり、メルロ＝ポンティにしてみれば、マルクスは、「意識の弁証法を、＜物質＞あるいは＜物＞の弁証法に変形」（EP70）してしまったのでは全くなく、むしろ「彼は、それを＜人々＞（les hommes）――もちろん一切の人間的施設を

含めた意味での、また労働や文化を介して、自然や社会的諸関係を変えていこうとする企てに関わっているかぎりでの〈人々〉――の方へと移し替えていこうと」（EP71）試みたのである。したがって、マルクスにおいて「物質」は、「人間的な物質（matière humaine）」、すなわち「実践の運動の中で把握された物質」（EP73）として理解されることになる。そして、この「人間的な物質」あるいは「人間的な対象」という言い方によってマルクスが指し示そうとするものは、まさにわれわれの経験のうちに現われてくる対象には、すべて、あらかじめ「実践」を通じての「人間的な意味が付着してしまっている」（SNS232）という、その「人間の共存の体系のうちに組み込まれる」以外には存在し得ない「物質」の在り方そのもののことに他ならないのである。だからこそわれわれには、「人間にとって外的な裸の物質（matière nue）だの、それによって人間の行動を説明しようということだのは全く問題になりはしない」（SNS231）とメルロ＝ポンティは言う。むしろ、逆にここで問題となるのは、マルクス本人が自身の唯物論を「実践的唯物論」と呼ぶことによって表現しようとしたもの、すなわち、「物質が実践の支点および身体として、人間生活のうちに介入してくる（intervenir）という」（ibid.）その「介入」の「様式」そのものに他ならないのである。そして、ここでさらに注意しておかなければならないのは、メルロ＝ポンティが、マルクスの「実践」概念を「人間が自然や他人と取り結ぶ諸関係を組織化していくばあいのいろいろな作用の交錯（entrecroisement）によって、ひとりでに描き出されるその〈意味〉」（EP69）として、改めてそれをより〈関係論的な視点〉から捉え返そうとしている点である。それは、エンゲルスの著作を出発点として展開してきた二〇世紀の「マルクス主義」が、もともと「マルクスのなかにあった関係論の豊かな可能性を廃棄して、関係や構造（例えば経済的構造）を実体化し、『物質（自然）の存在論』にまで仕立てあげて」[4]しまったことへの強い忌避の念からのことでもあろう。メルロ＝ポンティは、このような強い危機感に背後から後押しされつつ、自身の唯物論についての考察を、まさに人と物との〈関係〉そのものの在り方についての考察へとその焦点を絞り込んでいく。そして、以上のようなことから、最終的にメルロ＝ポンティは、マルクスの「唯物論」に従いつつ、自身の「唯物論」を、単に「意識から物に移されたもの」もしくは「人間的諸関係の物への埋没」、そして「歴史をその諸領域のひとつに還元すること」としてでは決してなく、たとえそれが「主体の客体への疎外の基礎をなして」いるものであるにしても、逆にこの「運動を逆転」させることを通じて、むしろ「もう一度世界を人間に統合しなおす基礎ともなるであろうような、人間と外界、主体と客体との血縁関係を表明する」（AD52）ものとして積極的に解釈し直そうとするのである。

二　人と物とのあいだを〈取り持つもの〉――「制度」

人と物との「血縁の関係」、それはメルロ＝ポンティにおいては、物が「人間の共存の体系のうちに組み込まれて」しまうと同時に、その「人間的な諸関係」もまた「物のうちへと埋没(enlisement)」(AD98)しているような、そういった「物が人となり、人が物となるような交換(échange)」の関係を意味していると言える。しかしながら、マルクス本人の唯物論にも、あるいはまた「一九二三年のマルクス主義」においても、この人と物との「血縁の関係を表明する」ためのその「表現の手段」そのものが「欠けていた」とメルロ＝ポンティは言う。具体的にそれは、まずひとつにその「人間的な諸関係」が「物へと埋没」する際に当然生じてくる筈の、「下部構造の惰性(inertie)とか経済的な諸条件、さらには自然的な諸条件の抵抗」などを「表現」するためのその「手段」のことである。それらが欠如しているからこそ、「彼らが記述した歴史には厚み(épaisseur)が欠けていて、歴史の意味があまりにも早く透けて見え過ぎる」。だからこそ彼らは、人と物との「血縁の関係」を正確に記述するためにも、何にもましてこの「媒介作用の緩慢さ(lenteur)」をこそ最初に学ぶべきだったのである。そして、それらに対してメルロ＝ポンティは、このような「惰性」や「抵抗」などといった「歴史の逆行性(adversité)」の側面を多分に含み込む人と物との「血縁関係」を、あらたに「制度(化)(institution)」というひとつの〈惰性態〉を導入することでそれを表現しようと試みるのである。

もともとこの「制度」という概念は、「意識の哲学のもろもろの難点に対する(ひとつの)治療薬」(RC59)として提案されてきたものである。「意識の前には、意識が構成した対象しか存在しえない」、つまり、その構成された「対象のうちにあるもの」は、その「意識の行為と権能を正確に反映したもの」でしかあり得ないということである。したがって、そのままいけばこの意識と対象とのあいだには何の「交換も運動も存在しない」という事態にまで行き着いてしまう。そして、そのような困難な事態を受けてメルロ＝ポンティは、逆にその両者の「交換」の在り方そのものを「復原」することの必要性を自らに要請し、自身の考察の照準を、単に「物と人間関係とを併置する(juxtaposer)」だけの「二分法」的な思考の枠組から徹底して遠ざけていくことにより、むしろその両者のあいだを「蝶番(charnière)」のように取り持つ「媒質(milieu)」や「媒介の作用」そのものへと合わせていこうと試みるのである。「制度」という概念も、まさにこういった人と物との関係を〈取り持つもの〉として編み出されてきたものなのである。人と物との「血縁の関係」を「表現」するために、まさに「マルクスの思考も、ここにこそその活路を見い出すべきであった」(AD98)

とメルロ＝ポンティは言っている。とはいえこの「制度」は、具体的に、人と物とのあいだをいかなる意味において＜取り持つもの＞なのであろうか。

メルロ＝ポンティにおいては、「人間にとって外的な裸の物質」など問題にすらならないことは既に述べた。それは、「物」が「人間的な共存の体系のうちに組み込まれる」なかで、「人間的な意味を付着した」かたちでしか存在し得ない性格のものであったからに他ならない。つまり、より具体的に言えば、それは、「物」が何らかの＜象徴性＞を伴ったかたちでしか存在し得ないということに因るものなのである。「物」は、その「人間的な共存の体系のうちに組み込まれる」過程をとおして、ひとつの「効力をもったシンボル体系(symbolisme)もしくはシンボル的な価値の網目(réseau)」(S145)なるものをかたちづくる。そのうえで「物」は、自らをあらためてその＜構造的な布置＞とでも呼べそうな「物の秩序」のうちに据え付けることを通して、自身を道具や製作物や宗教的な装飾品などといった「社会的な物」(AD209)として「実現」していくのである。そしてメルロ＝ポンティは、このような「シンボル的価値の網目」としての「物の秩序」を「制度」と呼び、物がいかにして「人間的共存の体系のうちに組み込まれて」いくのかを「表現」しようとするのである。しかし、これだけで人と物との「血縁関係の表明」がすべて成し遂げられるわけではない。というのも、「制度」という「物の秩序」をかたちづくっている「人間的な諸関係」もまた、逆にその「制度」という＜物質的な媒質＞なしには成立し得ないものだからなのである。つまり人間どうしのあいだで為されるありとあらゆる相互承認やコミュニケーションは、法律や言語、あるいは芸術や家族関係などといった「制度」という「シンボル体系」のうちにおいてしか生じ得ないものなのである。「『人と人との関係』を告げ知らせるもの」は、まさにその「人間的な諸関係」によってかたちづくられた、「制度」というこの「物の秩序」そのものに他ならないというわけである。もはやそこでは、「人間どうしの透明な関係」(SNS268)など決して想定され得ない。それどころか、むしろ物の「惰性」といった＜不透明さ＞を伴わない間主観的な共現前は、メルロ＝ポンティにおいては徹底的に忌避されることになるのである。以上のようなことから、そこでは、「制度」という＜物質的な媒質＞を通して、メルロ＝ポンティが言うところの「人と物との交換の関係」、すなわち「物が人となり、人が物となるようなこの交換」の関係が成立していると見なすことができるのではないだろうか。メルロ＝ポンティが人と物との「血縁関係」ということばによって「表現」しようとしたものは、まさにこういった「制度」を通じての人と物とのあいだの＜相互補完的な関係＞の在り方に他ならないのである。ちなみにこの「制度」は、「自然の発展法則」や「因果法則」など

といった、いわゆるエンゲルスの想定するような自然における必然的な法則に従いつつ己を「発展」させていくわけでは決してない。それは、つねにその「制度が何を意味しているかに従って発展していくのであり、またそれは永遠の観念に従ってではなく、自分にとっては偶然な様々な出来事を多少なりとも自らの法則に従わせながら、しかもその出来事の示唆によって自らも変わるがままになるといった仕方で発展していくのである」(AD98)[5]。そして、さらにそれはまた、「あらゆる偶発事によって引き裂かれはするが、その制度のうちにとりこまれながらも生きようと望む人間たちの無意識な振る舞いによって繕いなおされて(réparer)」(ibid.) いくものなのである。メルロ＝ポンティにおいて「制度」は、「物」自身が「社会的な物」として己を「実現」させることを可能にするものであると同時に、「人と人との関係」を成立させる唯一のものなのでもある。だからこそメルロ＝ポンティは、この「制度」を「精神という名も物質という名も相応しくない」ものとして、それを、むしろその両者のあいだを＜取り持つ＞ところの「中間物(un milieu)」と名付けることによって、人と物との「血縁の関係」をより一層「表現」しようと試みたと言うことができる。

三　「加工された物質――人間＝交叉配列」

「平行の関係」や「類比の関係」ではなく、人と物とのあいだを結ぶのは「血縁の関係（血縁性）」に他ならない。メルロ＝ポンティが、そのように両者の関係を「血縁の関係」と呼ぶのには当然それなりのわけがある。もともとこの「血縁」という言葉には、同族性や類縁性などといった、＜血脈＞や＜血統＞という強い血の繋がりの意味合いが多分に含み込まれている。つまり、この「血縁の関係」によって結ばれる両者にとっては、各々が、互いに相手に対して完全に異質なものであるということなど決してあり得ない。それどころか、むしろそこでは、その両者のあいだのうちに、もともと＜同一であったもの＞からの異なった二つの現出の仕方、もしくは別の派生の仕方などといった、ひとつのもの、あるいはひとつの運動における「二つの位相」といった在り方が想定されていると見なすことができる。したがって、敢えてこのような「血縁の関係」という強い＜血の繋がり＞を臭わせる言葉を用いるメルロ＝ポンティにとっては、物と人とをあらかじめ完全に異なった存在として前提し、そしてそれらがただ単に「併置」されることによってだけで結ばれる関係性へとそれが回収されてしまうことなど決して許されないのである。それどころか、もともと人も物も「あらかじめ統一されたもろもろのまとまり」(VI315) として

存在していたものであるという前提が、とくに後期のメルロ＝ポンティのうちには存在するのである。したがって、後期のメルロ＝ポンティにとって「血縁性」の問題は、もともとその「あらかじめ統一されていたもの」、つまりメルロ＝ポンティはそれを「客観的意味で一つとか二つとか数えられるわけではない一つの世界――前個体的であり、一般性であるような世界」(ibid.)[6] もしくは「無差別による深い絆」によって結ばれた、あらゆる「分凝(ségrégation)」や「次元に先立つ統一性」とも呼ぶのであるが、その「一つの世界」のうちに、いかなるかたちで「差異が到来」(VI270) し、またそれらが「断絶」することなく「血縁の関係」を取り結び続けるのかといった問いとして捉え返されることになるのである。つまりメルロ＝ポンティは、最終的にその「血縁の関係」を、「あらかじめ統一されていたもの」が、たえず己自身を「表」と「裏」へと捲れ上がらせるかたちで「差異」や「隔たり(écart)」[7]を呼び込んで来るような、ひとつの「襞(pli)」として己を繰りひろげていく在り方として捉えようと試みるのである。それはまさに、「あらかじめ統一されているもろもろのまとまりを、差異化しつつ表と裏のように結び付けてゆく」(VI315) 首尾一貫した運動としての「交叉配列(chiasme)」[8]の在り方として理解されていくのである。つまりメルロ＝ポンティは、最終的に人と物との「血縁の関係」を、「交叉配列」という新たな「表現の手段」を導入することによって記述しようと試みるのである。事実メルロ＝ポンティは、晩年の研究ノートのなかで、「加工された物質(matière-ouvrée)――人間＝交叉配列」(VI328) といったメモを書き残してもいる。そこでは、先に挙げた「制度」を通じての人と物との〈相互補完的な関係〉も、より一層〈相互に内属〉したものとして捉え返されることになるのである。とはいえ、最終的にこの「表」と「裏」といったかたちで「表現」される人と物との「血縁関係」とは、はたして如何なるものなのであろうか。

「表(l'endroit)」、またそれに対する「裏(l'envers, le derrière)」、「裏地(doublure)」、「裏面(l'autre côté, la contrepartie)」、あるいは「面(face)」と「背(dos)」といった言い方など、後期のメルロ＝ポンティにおいては、そういったひとつのもの、あるいはひとつの運動における「ふたつの位相」を表現するような術語を頻繁に見てとることができる。この「表」と「裏」、「面」と「背」という関係の在り方は、改めて言うまでもなく一方が表に現れている場合には、他方はつねにその裏側に、すなわちその表の面の背後へと引きこもっている状態にあるという関係性のことである。そしてその関係は、当然のことながらいつしかそれが裏返される可能性があるという反転の可能性、すなわち「可逆性(réversibilité)」なるものを併せもつものでもある。このことをよりメルロ＝ポンティ的な表現を用いて言えば、この

「裏面」とは、すぐれた意味において「隠されているものの次元」(VI272) あるいは「他の次元性」(VI309) であり、つまりは「根源的には現前しえないもの」なのではあるが、それは「表」の面である「見えるもの」を通じて現前を果たすところのものなのである。しかしながら、他方「表」の方、すなわち「見えるもの」の方も、メルロ＝ポンティにおいては、この「裏面」という「他の次元性へのカセクシス[9]による現前性、『二重底』の現前性」(VI309) によってこそはじめてそこに在ることができるものとして理解されるのである。すなわち「表」もしくは「見えるもの」は、「裏面」というこのすぐれた意味で「隠されているものの次元」に拠ってこそ、つまりはその「裏面」のうちになかば「懐胎(prégnant)」されることを通じてこそ、始めて現前することができるものと見なされるのである。そういった意味からすれば、この「表」と「裏」もしくは「面」と「背」とのあいだには、相互に「備給」し合いまた「抱摂」し合うような、いわゆる「相互内属(ineinander)」もしくは「相互着生(insertion réciproque)」(VI182) の関係が結ばれていることが見て取れるのではないだろうか。「表」と「裏」、「面」と「背」、そこには、「側面的なカセクシス(investissement latéral)」の関係としての「血縁の関係」なるものが結ばれているのである。事実メルロ＝ポンティは、この「側面的な関係」と「血縁性」といったことばを、ほぼ同義のものとして用いている。そしてメルロ＝ポンティは、このような「側面的な関係」の在り方を最終的に「交叉配列」の関係と呼び、「加工された物質」と「人間」との関係も同様の観点から捉え返そうと試みるのである。「加工された物質――人間＝交叉配列」、メルロ＝ポンティがそのように書き付けるとき、この「加工された物質」とは、当然「物」が「人間的な共存の体系のうちに組み込まれてしまう」過程のなかで生じてくる「物の秩序」、すなわち「制度」そのもののことに他ならない。そしてそこでの「人間」とは、その「制度のうちに取り込まれながらも生きようと望む人間」のことである。メルロ＝ポンティは、それらのうちに「表」・「裏」の関係を、つまり相互に「備給」し合いまた「抱摂」し合うような、「相互内属」もしくは「相互着生」の関係といった「側面的なカセクシス」の関係を見い出すに至るのである。メルロ＝ポンティの「唯物論」とは、まさに「物が人となり、人が物となるようなこの交換」の関係を「復原」すること、つまりは人と物との「血縁関係」を「表明」することに他ならなかった。そしてその目標は、最終的に「交叉配列」というこの「側面的なカセクシス」の関係をあらわすような「表現の手段」を獲得することを通じて、ついに達成されることになるのである。

注

本稿においては、メルロ＝ポンティなどの著作について以下のような略号を用いた。引用に際しては、文中で次の略号の後に原書頁（アラビア数字）を表記した。

DN… Friedrich Engels. *Dialektik der Nature*. KARL MARX FRIEDRICH ENGELS WERK BAND 20,DIETZ VERLAG BERLIN,1962.

Maurice Merleau-Ponty

SNS… *Sens et non-sens*,Nagel,Paris,1948.

E P … *Éloge de la philosophie*, Gallimard,Paris,1953.

A D … *Les aventures de la dialectique*,Gallimard,Paris,1955.

S … *Signes*,Gallimard,Paris,1960.

V I … *Le visible et l'Invisible*,Gallimard,Paris,1964.

R C … *Résumés de cours,collège de France 1952-1960*,Gallimard,Paris,1968.

（1）ここで問題とするメルロ＝ポンティの唯物論は、歴史の動きそのものをプロレタリアートの成熟過程に伴う「無階級社会という安定した状態へと向かう運動」としてみるような、ある種〈メシア〉的なマルクス主義を脱したのちの、つまりあらゆるセクト主義（陣営主義）の無効を宣言し、マルクス主義を徹底的に擁護すると同時に批判もするような、いわゆる「脱マルクス主義」以降のメルロ＝ポンティの唯物論である。これをある意味〈メシア〉的なマルクス主義とも見なし得るルカーチとの対比で問題にすると、メルロ＝ポンティの唯物論についての思想的な輪郭がより鮮明になってくるように思われる。

（2）もちろん、エンゲルス自身も、人間が単に必然の法則によって動いているとは考えていない。人間にとって、正常な状態が人間に相応しい状態、人間自身によって作り出されるべき状態であったことを、もちろんエンゲルスは認めていたからである。人間による自然の変化が、思考のもっとも本質的で直接的な基礎であると見なされたのはそのためである。「あたかも自然がもっぱら人間に作用を及ぼしているかのように解するのは一面的であり、人間もまた逆に自然に働きかけ、自然を変化させ、自分たちの新しい生存条件を作り出すということが忘れられてはならない」（「覚え書きと断片」Ⅲ「弁証法」）というエンゲルスの言葉は、そのことをよく示していると思われる。

（3）大月書店版『レーニン全集』第一四巻、『唯物論と経験批判論』、三一四頁。

（4）今村仁司「マルクス　神話的幻想を超えて」、『現代思想の源流』、講談社一九九七年、四二頁

（5）「制度」についてのメルロ＝ポンティの定義はこうである。「ここでわれわれが制度化ということで考えているのは、あらゆる経験に、それとの連関で一連の他の諸経験が意味をもつようになり思考可能な一系列、つまりは一つの歴史をかたちづくることになる、そうした持続的な諸次元をあたえるような出来事……ないしは、わたしのうちに残存物とか残滓としてではなく、ある後続への呼び掛け、ある意味の希求としての一つの意味を沈澱させるような出来事……のことである」（RC61）。

（6）またこの「世界」は、「差異化しながら表と裏のように結び付けて」ゆく「交叉配列」といった「或る種の首尾一貫した変形を伴った世界」であり、「予定調和」的な世界のことである。

（7）後期のメルロ＝ポンティにとって、「意味とはつねに隔たり」に他ならないものとして看做されている。そして、さらにこの「隔たり」とは、「存在論的な生地」からの個々の存在の現前を可能にし、また「保証」するものとして理解されもする。つまり「あらゆる存在はこの隔たりのなかで提示されるのであり、またこの隔たりは、その存在を知るための障害ではなく、それどころか、むしろそれはその保証にさえなるもの」（VI169）というわけである。

（8）「交叉配列」とは、「存在へのすべての関係は捉えると同時に捉えられることであり、捉える働きが捉えられ、書き込まれる、それもおのれが捉えるその同じ存在に書き込まれる」（VI319）といった関係

のことである。これを、「所有」といった観点から捉え返すことが許されるならば、それは一方が他方を「所有」し得るのは、それが他方に「所有され、それに拠って存在しているから」(VI178) ということになるはずである。またそれは「絡み合い(entrelacement)」とも言い換えられる。この「絡み合い」の概念とは、たとえば見るものと見えるものといった互いに異なった性質のものが、「互いに相手の周りを巡り、互いに相手の領分を犯し合うような」、つまり単なる「換位(renversement)」とは異なるかたちでお互いを「蚕食(empiètement)」し合い、また、それを通じて互いの存在を支え合うような「相互着生(insertion réciproque)」(VI182) 的な関係のことである。この相互の「蚕食」作用をとおして、各々は相互にその存在を「交叉」させ、「互いに縺れ合い(se brouiller)」、「編みあわさ」れる。一方が他方を「包み」つつ、自身が包み込んだ他方に「包まれる」。

(9) カセクシスとは、もともとはフロイトの用語Besetzungの訳語。日本では英語のcathexisを仮名書きにして「カセクシス」または「備給」という訳語が当てられる。フランス語でinvestissementと訳すのは一般に認められている(ときにはoccupationと訳すこともある)。エネルギー論的比喩にもとづいて形成された概念で、主体のもっている心的エネルギーが外界の対象や自分の身体に注ぎ込まれ、それへのプラスなりマイナスなりの関心がいつまでも続くこと。たとえば、ある種の感情を見ていると、主体はある量のエネルギーをもっており、それを対象との関係および自分自身との関係に、そのときそのとき量を変えながら分配しているということがはっきりとわかるように思える。例えば喪の状態では、主体の関係生活が明らかに貧弱になる。その理由は、失われた対象に過度の備給を行うからに他ならない。このことは、エネルギーの真の均衡が、外部の対象、幻想の対象、自己の身体、自我などのさまざまな備給のあいだで成立しているのではないかと思わせる。ちなみに「側面的カセクシス」はメルロ=ポンティ独自の概念。

(にしむらたかひろ　臨床哲学・博士後期課程)